

OPINION

中部経済新聞

ナビゲーター

西バルカン半島にある小規模で開放的な経済を持つ北マケドニアで、私は経営コンサルタントとして働いています。過去20年にわたり欧州連合(EU)への加盟候補国であり続けていますが、隣国から次々と門前払いを食らっています。

私の仕事は説明するのは簡単ですが、実際に行うのは困難です。中小企業に足を運び、日々会社のオーナーがその現場の真ん中に立ちながら、もはや気づくことのできなくなった点を見つけ出します。身近すぎるからこそ、かえって

日本への期待 世界各地から

180

見えなくなるものがあるので。こうした案件を数多く手掛けるうちに、業種や時期を問わず、似たようなパターンが繰り返し現れることに気づきました。この春、同時に診断を行っていた2社においては、その傾向は特に顕著でした。

表面上、この国の状況は安定しているように見えます。昨年の経済成長率は約3・5%でした。2022年、ロシアのウクライナ侵攻によりエネルギー価格が急騰し、誰もが恐れたインフレも、それ

現況、そして地理と歴史

北マケドニアから(上)

以降は正常な水準へと落ち着きを取り戻しています。しかし、私が足を踏み入れる企業内部では、経営者たちは身構えており、その大半は間違った事柄に対して備えています。

日本の読者のために、2人の経営者と私が住む北マケドニアについて、ご紹介したいと思います。バルカン半島の南部にある小さな内陸国で、五つの国に囲まれています。ギリシャの北に位置し、ブルガリア、セルビア、コソボ、アルバニアとも国境を接しています。山々と古代湖があり、歴史をさかのぼるとローマ、ビザンティウムにより、またのちには5世紀にわたってオスマン帝国の支配を受けてきた回廊地帯でもあります。人口は200万人弱で、面積でいうと日本の九州よりも小さいです。

遠く離れた日本にお住いの読者にとっては、単に小さなヨーロッパの国々のひとつに映るかもしれません。残念なことに、隣国が私たちの地理的な位置、歴史、文化、信念について長い間クレームを続

けていたことが大きく影響し、いまだEUに加盟していません。

しかしながら、北マケドニアには世界に誇るものがあります。オフリド湖はヨーロッパでも最古の、また最も深い湖の一つです。湖畔には聖クレメントによって建てられた、大陸最古のスラブの学舎があります。この地域で発達したキリル文字がロシア語の基礎となり、世界最大の国で今でも読み書きに使われています。

【ダンチョ・ディムコフ、リム中産運】

(月曜日に掲載)